

資料20

サル類の加齢性病変に関する病理学的研究

柳井徳磨、野田亜矢子、柵木利昭（岐阜大・獣医・病理）

加齢に伴い増加する病変の一つとして腫瘍性病変があげられる。ヒトの胃癌は、最も頻度の高い悪性腫瘍の一つであるが、動物における胃癌の発生は希である。これまでサル類での報告が極めて少ない胃癌の症例を見出し、病理学的検索を行った。

個体は、20歳雌のブラザサル (*Cercopithecus neglectus*) であり、臨床的には、強度の食欲不振と運動抑制を示し、受診の翌日、昏睡状態に陥り死亡した。

剖検では、胃の噴門部領域に 60×55×35 mm 大の灰白色腫瘍が認められた。腫瘍の粘膜面中央部には 20mm の深さの潰瘍が認められ、漿膜面では脾臓と強固な癒着を示した。

組織学的には、腫瘍は管状腺癌の浸潤増殖から成り、癌は粘膜下層、筋層を越えて漿膜面に浸潤、癌性腹膜炎を呈していた。癌細胞は極めて異型性が高く、分裂像も豊富で、細胞質にはPASおよびアルシアンブルー染色陽性の酸性あるいは中性粘液を有していた。癌はリンパ管内で浸潤増殖し、リンパ節、脾臓および肺には転移巣が認められた。免疫組織学的には、ヒト胃癌の有効なマーカーであるCEA、リソチーム、ガストリンおよびケラチンに陽性であった。本例は浸潤の様式から、進行胃癌に相当すると考えられる。その組織像および免疫組織学的特徴はヒト胃癌に極めてよく類似していた。ヒト胃癌との比較において貴重な1例と考える。

資料21

霊長類のシラミのミトコンドリアDNAの解析

粕谷志郎（岐阜大・地域・環境）、長野 功（岐阜大・医・寄生虫）、後藤俊二（京都大・霊長研）

シラミは宿主特異性が高く、宿主と平行した進化をたどっている可能性が高い。そこで、霊長類のシラミのミトコンドリアDNAによる系統樹の作成を試みた。シラミは虫体から、また宿主については血液から常法により全DNAを抽出した。これを鋳型としてすでに報告されている cytochrome c oxidase subunit I (CO I) プライマー (Science:265.1087-1090) を用いてPCRを行った。このPCR産物をpT7 Blue T vectorにサブクローニングした後ABI オートシーケンサー 373Aにより塩基配列を決定した。

成績 下図のような系統樹を作成した。宿主の系統樹ともよく一致し、共進化の可能性が示唆された。ケジラミとアタマジラミの分岐は、ヒトが体毛を失った時期と一致するかもしれない。

